「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉が昔より言い伝えられています。現在、地球温暖化などで昔とは季節感も変わりつつありますが、今でも彼岸花は時期を狂わせることなく花を咲かせるのには驚きを隠せません。

さて、お彼岸といえば、古来より「ぼたもち」や「おはぎ」がお供え物の定番としてあげられます。「ぼたもち」や「おはぎ」共に、もち米や地域によってはうるち米を混ぜて炊き、丸めたものを小豆で包んだものですがこれにはどういう意味があるのでしょうか。まず、一般的にはもち（米）は五穀豊穣を表し、小豆は魔除けに通じるとされています。このように、春の彼岸を境に新たな生命が生まれ、やがて成長し、花を咲かせ実を成らせることに大いなる希望を託するゆえ、大切なお客様・行事などにふるまわれており、先祖追善法要の際にもお供えしていたといいます。これより、季節の変わり目という大切な時期であるお彼岸にあわせて「ぼたもち」や「おはぎ」を供えるという現在の慣習に至るのではないでしょうか。

「彼岸（ひがん）」は悟りの境地を意味し、それに対し煩悩渦巻く私たちの世界を「此岸（しがん）」といいます。私たちは「此岸」において、目的を明確にもって生き続けることが大切です。その生き方いかんにより、「彼岸」に渡ることができるのです。仏さまはその行動の規範を『法華経』にお示しになられました。これを季節に当てはめますと、先祖の世界（彼岸）を過ぎ去った季節、また私たちの世界（此岸）をこれから迎える季節として表現し、その季節の合わせ目を仏教で重要視される「中道」として暦の中で形骸化したものが現在でいうお彼岸と伝えられています。

このような大切な時期である期間にご馳走であった「ぼたもち」をお供えし、先祖への感謝の気持ちを持ち、大切にすることが大事だと思われるのです。

花を咲かせ実を成らせる生き方とは、日々の生活の中に、お題目をお唱えすることです。

春のお彼岸は、新しい生命の開花の瑞祥です。

春彼岸　はなまつり